

A. L. von Schlözer の統計思想

浦 田 昌 計

は し が き

本稿では、国状学派統計学の考察の一環として、A. L. von Schlözer (1735—1809) の統計学をとりあげる。

H. Conring にはじまり、Achenwall によって確立されたドイツ大学統計学（国状学）は、19世紀までドイツの統計学界に生き残ったが、19世紀初頭のいわゆる統計学の論争（混乱）をへて、ドイツ社会統計学の成立によって最終的に止揚されたといわれる。

その間、国状学派統計学は、政治算術との交渉、官庁統計との係わりをもたざるをえず、それによって種々の影響をうけた。すでに Süßmilch の「神の秩序」が Achenwall の統計学にはほぼ並行して成立し、それにたいして Achenwall が無関心でなかったことは、以前に私が示した⁽¹⁾。Süßmilch の政治算術的研究は、ドイツにおいて直接の後継者をえなかった。しかし18世紀の最後の四半期頃より、国状学派統計学の一分派として表的統計学者が群生し、それにともなって政治算術的計算が盛んに利用される状態が生じた。一方では、ドイツにおいても、プロイセン、オーストリアを先頭に官庁統計のある程度の前進が生じている。

このような状況が、Achenwall の直接の後継者として、1772年から1805年まで Göttingen 大学の統計学を担当した、Schlözer の統計学にいかんか反映しているかを検討するのが直接の課題である。Schlözer は、長い生涯の終りに近い1804年に、彼の統計学上の見解のまとめともみられる「統計学の理論」を書いたが、この書物は、Wagnér によれば、非常に大きな影響をもったと

(1) 拙稿、アッヘンワールの政治算術観（「統計学」第7号、1958）。

いわれる。⁽²⁾

ところで、上述の統計学論争は、この著作の出版（1804年）からまもなく、つまり1806年から1811年にかけて激しくたたかわされた。それは、「ゲッテンゲン学会通信」を中心とした「ゲッテンゲン派」（旧派）が表的統計学を「卑俗なる統計学」「表奴」として攻撃したのにたいして、表派統計学（新派）が「新ライプチヒ文学新聞」や Crome の「ゲルマニア」によって反撃したものであった。⁽³⁾

ところで、この新旧両派の論争において、Schlözer がいかなる役割をはたしたのかは、従来の研究では必ずしも明らかでない。もちろん Schlözer はすでに晩年にあり、1806年以後の論争には直接には参加しなかったと考えられる。しかし、時には Sohlözer は新学派攻撃の主導的役割を果たしたかの如き叙述もみられる。たとえば、H. Solf は、この論争に関連して Schlözer がすでに1752年に Anchersen の表的統計学を激しく攻撃したとし、⁽⁴⁾ また最近では、Ch. Lorenz がこの Solf に依拠して、同じ見解をのべている。⁽⁵⁾ 「ゲッテンゲン学界通信」の1752年号に Schlözer が執筆したと Solf がいうのは時期的に疑問であるけれども、Schlözer が Anchersen にたいして批判的であったことは考えられると思う。しかし、このことをもって、Schlözer が、後の新旧両派の論争の先駆者であり、あるいはその中心であったかのごとく描き出すことには疑問をいだかざるをえない。すでに Lueder は、Schlözer が最後まで「卑俗なる統計学の保護者」であったとのべており、⁽⁶⁾ Wagner も

(2) 大内兵衛訳、ワーグナー、統計学、統計学古典選集第6巻、71頁。

(3) Lueder, Kritik der Statistik und Politik, Göttingen, 1812. 高野岩三郎訳リューダー、統計学批判、統計学古典選集、第1巻、昭和16年、松川七郎、A. F. Lueder の統計学批判について、経済研究10巻1号、1959. 等を参照。

(4) H. Solf, G. Achenwall, sein Leben und sein Werk, 1938, S. 46.

(5) Ch. Lorenz, Werdegang und gegenwärtiger Stand der statistischen Hochschulunterrichts unter besonderer Würdigung seines Begründers. (Allgemeine Statistische Archiv. Bd. 33. 1949. Heft 1) S. 57.

(6) Lueder, a. a. O. SS. 44—45. 邦訳114—116頁。

また、「Schlözer は、爾余のゲッチンゲン学派の人々と共に、表的統計家や政治算術家に対して共同の戦線を張ったけれども、彼は、これらの人々のごとき一面性には陋さなかつた」と述べ、「シュロエーターは数や表の意義を十分認識していた」と書いて⁽⁷⁾いる。Mayr も、Schlözer が「過去の統計学の可能性を認めたこと、経済的要因をより多く強調したこと、数量的資料を原則として認めたこと、官庁統計の重要性を認識したこと」においてアッペンワルより理論的に進歩しているとして⁽⁸⁾いる。

私は、ここで論争そのもの、およびそこにおける Schlözer の役割という問題に直接ふれることはできないが、ここに引用したことからもうかがわれるように、Schlözer の統計学を単純に、非数字的、歴史的記述派とみなしたり、まして、Lorenz のように Schlözer が Achenwall とともに「調査技術的および整理技術的に基礎の確実な算術的統計学の厳格な拒否において一致していた」と断定したりすることは出来ないことを、やや詳しく明らかにし、国状学派にたいする戯画化された単純な見方を再検討し、それを統計学の歴史の中に正当に位置づけるための一助としたいと思う。

ここでの問題の中心は、Schlözer における統計学の対象と方法の規定、そして彼の官庁統計と政治算術についての見解にかかわる。これを私は、① Schlözer の生涯と統計学への歩み、② Schlözer の統計学の規定と統計理論の課題、③官庁統計にたいする見解、④数量的観察と政治算術にたいする見解、について検討したいと思う。なお、本稿において参照しえた資料、文献は限られたものである。⁽⁹⁾したがって十分な断定をひかえなければならない点

(7) 邦訳前掲書74—75頁。

(8) G. v. Mayr, *Theoretische Statistik*, 2. Aufl. 1914. *Statistik und Gesellschaftslehre* 1 Bde., S. 323. また 足利末男訳, ヨーン統計学史, 1956 116頁, 足利末男, 社会統計学史32—48頁。

(9) Schlözer の著作で、筆者が直接に利用しえたのは次の著作目録のⅧ, IX, XV である。これらの原書を利用しえたのは、大橋隆憲, 高木秀玄, 野村良樹の各先生の御好意によるものであった。また、後掲の Fürst のモノグラフィーは松川七郎先生の御好意をたまわった。本稿では、このうちの XV, *Theorie der Statistik*

が多い。また、Schlözer の統計思想を考えるうえで、それを彼の社会認識・歴史認識と切り離しえないことはいうまでもない。Schlözer は、その歴史学、国家法の研究、教育活動、ジャーナリストおよび政治評論家としての活動において、偉大なる啓蒙家として一時期のドイツの思想界に大きな影響をもった。これらの点をも含めて、Schlözer を全面的に検討することは、本稿の課題とはしえなかった。なお本稿でのべるところはすでにこれまでの統計学史研究において指摘され、紹介されているところが少くない。私はただ、Schlözer の初期の労作を含めた若干の資料によって不明確な点を明らかにし、私なりの整理を試みたものである。

Schlözer の主要著作

- I) Neuesten Geschichte der Gelehrsamkeit in Schweden.
- II) Färsök til en almän Historia on Handel och Sjöfart, 1758. (deutsch. Versuch einer Geschichte der Seefahrt und Handlung, 1761.)
- III) Neu verändertes Rußland, Unter dem Decknamen Haigold, Riga 1768.
- IV) Von der Unschädlichkeit der Pocken in Rußland, und von Rußlands Bevölkerung überhaupt, Göttingen 1768.
- V) Allgemeine Geschichte von dem Norden, 2 Bde, 1771.
- VI) Vorstellung der Universalhistorie, 1772. (3. Aufl. unter dem Titel: Weltgeschichte, 2 Bde, 1785—1789, neue Ausg. 1792—1801.)
- VII) Oskold und Dir……, Göttingen und Gotha, 1773.
- VIII) Briefwechsel meist statistischen Inhalts zum Versuch herausgegeben, Göttingen 1775.

を中心として考察し、原書の入手の困難を考へて、冗長でも、できるだけ忠実な引用を試みた。VIII, IXはその性質上、単純な要約はしえないがSchlözerの統計思想を具体的に理解するうえでもっと取上げられてしかるべきだと思う。また、著作IVはSchlözerの初期の統計思想を見るためには欠きえないものと思われるが、本稿では原書の入手がまにあわなかったのでПлуха, Очерки по истории статистики в СССР, том 1. Москва 1955, стр. 318—329のかなり詳細な引用を利用した。

- XI)* Briefwechsel meist historischen und politischen Inhalts, 10 Theile, 1776-1782.
- X) Vorbereitung zur Weltgeschichte für Kinder, 1779. (6. Aufl, mit einem 2. Tl., 1806.)
- XI) Staatsanzeigen, 18 Bde., 1783-93.
- XII) Allgemeine Staatsrecht und Staatsverfassungslehre, 1793.
- XIII) Nestor (Übersetzung des russ. Chronisten Nestor bis zum Jahre 980), 5 Bde., 1802-1809.
- XIV) A. L. v. Schlözers öffentliches und Privatleben, 1761-1765, Göttingen 1802.
- XV)* Theorie der Statistik, nebst Ideen über das Studium der Politik überhaupt, Erstes Heft, Einleitung, Göttingen 1804.

以上は主として, C. Meitzel, Schlözer (in Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl, Jena 1926) による。そしてこれは完全な著述目録ではない。

I Schlözer の生涯と統計学への歩み

Schlözer の統計学への道程は, 決して直線的なものではなかった。彼が統計学の教師たることをはっきりと職務とするに至ったのは, 1772年に彼が Achenwall の死のあとをうけてその講座を委ねられたときであり, 彼は37才であった。しかしながら比較的多彩な彼の青年時代の遍歴の中に, 彼の統計思想形成の機会があったと考えられるので, まず, 遠回りながら彼の生涯を, とくに統計学との関連において必要とみられるかぎり, たどっておこう。⁽¹⁾

1735年に, Hohenlohe-Kirchenberg 伯に属する Gaggstadt で牧師の息子として生れ, 父の死によって, 5才のとき祖父 Haigold—メソジスト派牧師

(1) ここでは主として, F. Fürst, August Ludwig von Schlözer, ein deutscher Aufklärer in 18. Jahrhundert, Heidelberg 1928に依拠したが, ロシアにおける部分は, M. B. Птуха, Очерки по истории статистики в СССР, I. стр. 215-218, 318-329 (Москва 1955) におうところが大きい。

館の使用人であった一にひきとられた。Schlözer は、はじめ二代にわたる伝統に従って牧師となるべく、Wertheim のギムナジウムから Wittenberg 大学へと進んだ。Schlözer は、神学には熱心ではなかった。牧師への道をすてたわけではなかったが、Wittenberg 大学で唯一の興味をもって学習したのは文献学的 (philologisch) な研究であった。この文献学にたいする関心のために、彼は Wittenberg 大学の課程を終ったのち、さらに一年間 Göttingen 大学に学んだ (1754年) ののであるが、この大学で、とくに Michaelis 教授について学んだことが、彼の生涯の第一の転機となった。すなわち彼は Michaelis の比較言語研究の方法と計画に魅せられ、SEM族との数年間の共同生活によって彼等の言語の知識を得ようとする課題を与えられ、この計画を追求することになったからである。⁽²⁾ Schlözer が Göttingen 大学での一年間の研究の後に Stockholm へ家庭教師として赴いたのも、この東方旅行の資金をさしあたり自分でかせぐためであった。

スエーデン滞在 (1755—59) の時期は、Schlözer の後の活動にとって重大な影響をもつものとなった。Stockholm でまもなくこの家庭教師の職を失い、ドイツへも帰れないままに Upsala に移住し、学生たちに教える一方で、その大学で植物、動物学、ゴート語、アイスランド語などを学んだが、この時期で注目されるのは、一つには彼の後期の活動につながる文筆活動の開始であり、とくに「商業海運一般史試論」(1757)の執筆であった。第2は、彼が報酬のために、Hamburg の書籍商の依頼でスエーデンにおける政治的出来事について定期的報告を送ることを引受けたことである。⁽³⁾ 当時スエーデンは王権にたいする貴族の攻撃が激化し、帝国議会での激しい論争、文書合戦がおこなわれ、さらには宮廷クーデターとその失敗、主謀者の

(2) 彼がこの時期に Michaelis および Göttingen 大学から得たものは、Göttingen 的啓蒙主義のイデーがあり、Michaelis を通じて Montesquieu の著作を知り、それが Schlözer の世界観の基礎になったと Fürst はいう。Fürst, a. a. O. SS. 20—21.

(3) これは Schlözer の後のジャーナリスト的活動の最初でもある。

処刑などが相続いだ。通信員としてこれらの事件を追った Schläzer が政治的問題にたいする関心を深めたのは当然であり、Fürst は、このことが国家生活の基礎についての研究の必要を Schläzer に自覚させるとともに、彼の貴族についての反感はこれに由来していると指摘している⁽⁴⁾。第3は、彼がそこで1755年に Wargentin の指導によって設けられたスエーデン製表委員会に立寄り、Wargentin 自身に会って、人口の自然変動統計と人口調査の様式を入手するとともに、人口問題に目を開かれたことである⁽⁵⁾。

1759年、Schläzer は再び Göttingen 大学で学び、はじめて、Achenwall の統計学に接した。彼は、依然として実地研究のために東方に住みつくことを計画していたが、そのためにさらに自然史、物理、数学、地理を、そしてもう一度文献学を研究するべく Göttingen に赴いたのであった。そしてそこで彼のスエーデンで体験した政治的事件を体系的に理解するために、彼は Pütter と Achenwall のもとで政治的および法律的な諸講義をも聴講した⁽⁷⁾。

この二年間の Göttingen での研究の後に、Schläzer は、思いがけず、ロシアに行くことになった。Michaelis が当時 Petersburg で牧師の職にあった A. F. Büsching の紹介をうけて、Petersburg のアカデミー会員、歴史学者 G. F. Müller の家庭教師兼助手として Schläzer を推薦したのである。このロシアでの滞在(1761—69年)は、結局彼の長年の東方計画を挫折させたが、しかしこの絶対主義的大帝国のもとでの生活によって彼は忘れがたい新しい刺激を受けとり、視野を拡大した⁽⁸⁾。

彼はまず、ロシア史についての確実な資料の蒐集と刊行を意図していた Müller の助手として、彼から典拠研究の必要を学んだ。彼は、Müller が豊

(4) Fürst, a. a. O. S. 28.

(5) Прыха, a. a. O. стр. 320.

(6) Fürst, a. a. O. S. 28.

(7) 当時、Göttingen は7年戦争(1756—63)の戦場の一つとなり、しばしばフランス軍に占領されるという状況であったが、講義はかろうじて続けられていた。

(8) Fürst, a. a. O. SS. 30—31.

富な情報をもっているロシア帝国の地理と統計を主要部分とする出版物を計画した。さらに彼は、ロシア史の基礎として、ロシア語の、ことに中世の史料—Nestor の年代記—の考証版を出すことに新たな情熱をもった。しかし、彼が東方計画を固執して Müller と対立したために、これらの仕事は、Müller のもとでは果せなかつた。

彼のアカデミーの地位を得ようとする望みは Ломоносов の反対をうけたが、エカテリーナ二世の即位（1762年宮廷革命）によって Taubert (И. И. Тауберт) がアカデミーの実質上の指導者となったときに、その推挙で彼は助手の地位を得た。Taubert はさらに彼に、貴族寄宿学校のラテン語教師の地位をあっせんした。

彼は1762年6月からこの学校で教えたのだが、彼はまもなく、授業計画の中に、地理学も「祖国学」—この言葉を彼は統計学＝国状学の意味で使った—もないことを Taubert に指摘し、結局、彼自身が毎週5回の統計学の授業を委任された。Schlözer は、この授業を傍聴した Taubert との討論をつうじて、ロシアについてのより正確な統計的情報を得る必要を Taubert に理解させ、その権威によって彼の親交ある国家機関の有力者のもとに入って来る諸報告を入手し、その抜萃をつくった。これらは、彼の偽名の著書「革新されたロシア、あるいはエカテリーナ二世の生活、信憑性がある情報にもとづく」⁽⁹⁾（第1部1767、第2部1772、追録、1769、II、1770）の資料の一部となった。

さらに注目すべきは、Schlözer がロシアの人口動態統計の作成に関与したことである。1763年ロシアで他国からの移民の促進のために、孤児院、養育院、医療院が設けられた。これらの施策について Schlözer は Taubert と度々議論し、一貫して「ロシアは、その法外に稀薄な人口を、移民によらず、自分自身で増加させねばならぬ。しかし、これは人口に関する統計表なしに

(9) 上掲著述目録のⅢ.

は思いもよらないことだ」と主張し、また、納税人口調査が人口の真の数の認識のために適切な情報を与えないこと、このためにも、また他の目的のためにもスウェーデンにみるように、教区別の教会記録が必要なことを Taubert に説いた。こうして1763年末に、Taubert は Schlözer に人口の自然変動の諸調書の記入表式を作成することを求めた。このとき彼が書いた要綱にしたがって、1764年2月29日付で、ペトログラード市におけるこれらの調書の記入についての勅令が発せられたのである。さらに Schlözer は毎月アカデミーへに送られたこの報告をもとにして1764年の10ヶ月分のデータの総括をおこなうことによって「これらの純然たる数字からいかなる効用を引出すことができるかを示そうと決心し」、そのためにあらためて Süßmilch, Wargentin⁽¹⁰⁾ その他の著作を研究し、資料からの計算によって10ヶの総括表とそれからの結論をまとめて、Taubert に提出した。

データの加工の過程で、自分の作成した表式の不十分さをますます確認した Schlözer は Taubert に、たんに表式の改善だけでなく、スウェーデンと同様なロシア統計局の設立を提案した。かくしてやがて Taubert によってロシア統計局創立計画書とエカテリーナ二世への請願書が、A. B. Олсуфьев⁽¹¹⁾ を介して提出されたが、残念ながら、これは結局握りつぶされたままに終わった。

その間彼は依然として中世ロシア史の研究に主たる精力をそそいだが、それは彼の健康を害したので、1767年に長い病気休暇をとってドイツに帰った。病気は回復したが、ロシア・アカデミーでの彼の不遇も手伝って、結局

(10) Schlözer が Süßmilch の「神の秩序」をいつはじめて読んだのかは明らかでない。ロシアで彼がそれを研究したさいには、彼はそれを当時ロシアに滞在していた Büsching から借りている。Птуха, а. а. О. стр. 320.

(11) Птуха, а. а. О. стр. 321.

この請願書には Schlözer によってロシアの人口統計と人口問題について「ロシアの愛国者」というペンネームで書かれた論文と、Petersburg の人口についての上述の総括表および結論とが添えられた。ちなみにロシアの統計機関は1811年に警察省（のち内務省に合併）の統計課として設けられた。その課長には Schlözer の弟子 Герман (Hermann) になった。Птуха, Очерки по истории статистики в СССР. II (1959) стр. 217, 229.

彼は再びロシアへ帰ることを断念し、1769年3月に正式に辞表を提出した。彼は1768年の春に、先の材料を内容とするロシアの人口にかんする論文集を出版した。⁽¹²⁾

ロシア科学アカデミーの辞職後に、彼は、Göttingen 大学の教職を希望し、Michaelis および Strube の推挙によって、1769年正教授として迎えられた。はじめ彼は北歐史—ロシア史の講義をおこなうことを期待されたが、彼はロシア史を時に特殊講義として扱っただけで、そのかわりに一般世界史の通年講義をおこない、また、彼の教師 Achenwall と交代で政治学を講義した。そしてまもなく(1772年)に Achenwall が死亡したときに、その統計学、政治学および国家史の教授職が彼に委ねられ、さらに、1778年に彼は政治学の名誉教授職が与えられた。彼のこれらの講義は非常な人気を博したが、講義での評判とともに彼の名声を高めたのは、政治的(また統計的)な内容の雑誌の発行にあった。彼は、講義のためのフランス、イタリアへの調査旅行によって得た情報、そこで知遇をえたフランスの学者との活発な文通、またスエーデンやロシアの古い友人のと文通を通して得たこれらの国についての情報の中から重要な部分を雑誌の形で大衆に伝えることを決心して、1774年6月15日にその第1冊を出し、1775年にそれまでの14冊を合せて書物の形で出版した。⁽¹³⁾ これはその後も表題を変えて続けられ、⁽¹⁴⁾ その評判が高まるとともに新たな寄稿者、資料提供者を得て、さらに内容豊かにされた。その性格上陰に陽に政治的な圧力をうけながら続けられた Schlözer のこのジャーナリスティックな活動は、1793年2月、ヨーロッパの反動の強化の中で発行を禁止されるまで続いた。

その間一時代をリードした彼の啓蒙的立場は、彼の晩年フランス革命のあ
 とには古臭くなり、政治的見解は孤立し、彼の講義も一時の人気を失った。⁽¹⁵⁾

(12) 著述目録IV。

(13) 著述目録VII。

(14) 著述目録IX, X。

(15) Fürst, a. a. O. SS. 58—59. またフランス革命にたいする Schlözer の態度に

彼は主として歴史研究、とくにロシアの年代記の出版の準備に没頭した。彼が1793年に「一般的国家法および国家基本制度」を出版したとき「国家学体系」の第二部として予定された「一般統計学」の計画は一時中断され、11年後の1804年になってその第一冊が「統計学の理論」としてあらわれたが、それは Schläzer にはじめて愛国的感情をいだかせたといわれる Napoleon の Hannover 進撃、プロシア軍の撤退、そして Hannover の降服という事態の中で書かれたものであった。次の年には Schläzer は Göttingen 大学を退職し、1809年に生涯を終っている。

II Schläzer における統計学の規定と統計理論の課題

(1) 統計学の対象および課題

Schläzer が Achenwall から統計学についての講義をうけたのは I で述べた如く、彼がスウェーデン滞在から帰って Göttingen に再入学したときであった。この時、彼は、スウェーデンの政争の中で得た知識や問題について体系的な理解をうるために、Pütter や Achenwall の法学、政治学の講義を聴講し、その一環として Achenwall の統計学を聴いたのであった。それらは、Schläzer によってかなり素直に受け入れられたものと見てよからう。

Schläzer がロシアでの貴族寄宿学校の教師になったときに、彼はそこに地理学も国状学もないことを知り、「祖国学」(ロシア国状学)の授業を進んで担当した。そこで彼が試みた講義はロシアの地理的、法制的、軍事的、経済的(商業と海運)事実についての知識であった。⁽¹⁾

Schläzer は、一貫して、統計学を広義の政治学(国家学)に、そしてその歴史的部分の一部として位置づけた。⁽²⁾これはまさに Conring, Achenwall 以

については、同上、SS. 135—138参照。

(1) Прыжа, а. а. О. т. I. срр. 215—218.

(2) 彼が Achenwall の講義をうけついで直後の彼の講義録によれば、彼は、政治学体系を I、可能国家について; 哲学的研究, II、現実的国家について; 歴史的研究, 1. 歴史的部分, a) それらはどんな状態か(統計学によって), b) それらはどうし

来の伝統である。

すなわち、現実的な国家、個々の国家が統計学の対象である。Schlözner は彼の「統計学の理論」において、それまでの種々の規定を吟味しながら⁽³⁾、結局 Achenwall の規定がもっとも適切だとする。すなわち「人間と土地」とを総括概念とする国家顕著事項の総体、それが統計学の対象であると。では、何を顕著事項とみるか。国家（人間と土地）を様々な観点から記述するもののうちで、「数千の顕著事項から、ただ国家の幸福に、明瞭なまた隠れた、大小の、影響をもつ事項だけをとりあげる計画をもって」あらわれるのが「国家識者」(統計学者)であり⁽⁴⁾、この計画は国家の官吏、国家市民、世界市民という三種の国家識者にとって価値がある⁽⁵⁾。統計学の究極の課題もまたそこにある。「国民の幸福（住民によって享受される幸福の量）および「その点における国民の前進ないし後退を測る」ことがこの科学の課題であるとする⁽⁶⁾。

そこで、統計研究者には、1. 国家顕著事項を選び出し、2. それ为国家顕著事項である理由を示し、3. 国家全体のそのときどきの状態を判断するために、またそれを他の時点および他の国家の状態と比較し評定するために、便利に概観しうるように、彼の資料を整序すること、が必要になる⁽⁷⁾。

Schlözner は、何が必然的に国家顕著事項に属するかと問い、「決して異議

てそうだったか（歴史）；2. 哲学的部分、に区分されているという（Furst, a. O. S. 93）。「統計学の理論」では、政治学（国家についての学）のコースを、I. 歴史的部分、1. 統計学、2. 狭義の歴史、II. 政治的部分、1. 形而上的政治学（Metapolitik）、2. 国法学、3. 国家基本制度（統治形態、政治諸組織）、4. 統治科学（実際政治学、国家行政についての学）、に区分している。Schlözner, Theorie der Statistik, SS. 94—96.

(3) ここで吟味されているのは、Achenwall, Walch, Toze, Curtius, Remer, Lueder, Meusel, Sprengl らドイツの国状学者と、プロイセンの大臣 Herzberg, イギリスの Sinclair, フランスの Ballois, Société de Statistique, Clament などの所説である。

(4) Theorie der Statistik, S. 34.

(5) Ebenda. SS. 35—36.

(6) Ebenda. S. 58.

(7) Ebenda. S. 37.

の出されない対象のほか、おそらく国家行政がこれに属する、……また国家制度（統治形態）を評定することなしに、国民の幸不幸を測ることを誰があえてするだろうか⁽⁸⁾と伝統的立場を守る。ここで彼が決して異議の出されない対象⁽⁹⁾というのは、他の個所で「基本統計」とよばれるもの⁽⁹⁾、つまり周知の体系——Vires-Unitae-Agunt——の第1のもの、「国家の諸力」に相当し、1.人間、2.土地、3.生産物、4.流通貨幣にまとめられるものである⁽¹⁰⁾。

John によって「不自然な公式」⁽¹¹⁾といわれるこの三分割は、しかし、たとえば Achenwall の体系に比して、国家の基本力、社会の生産力的要素を第一に持ち出す意味をもっていたことを見失ってはならない。

Schlözer が、国状学としての統計学の対象とし、課題とするところは、その規定において Achenwall のばあいと異なる。ただそれは内容的には彼自身の研究をも含めたドイツ内外での統計学の新しい試み、さらには現実の要求を考慮に入れ、それを組み入れようとした。たとえば彼が統計学の対象を現在に限定しなかったことは周知のごとくである⁽¹²⁾。過去の統計学。彼はまた統計学の叙述を基本的には一国単位で考えたが、それに限定せず、事項別の比較をおこなう「Büsching の比較統計学」を高く評価している⁽¹³⁾。しかし、後にも述べるように、これらの拡大は、あきらかに国状学の前進であるとしても、統計学の Achenwall 的学問規定そのものにとっては矛盾を拡大するものであったこともあきらかである。

(8) Ebenda SS. 38—39.

(9) Ebenda. S. 64.

(10) Ebenda. S. 59.

(11) 足利末男訳ヨーン統計学史、109頁。

(12) Theorie der Statistik, S. 93.

(13) 「それは真正の統計学である。……計画は卓越している、またそれらの Statskunde についてわれわれが断片的なものしかもたない国の個々のデータも、そのさい使用しうる、それだけに Büsching が……一人の後継者ももたなかったことは不思議である。」Ebenda. S. 88.

(2) 統計学の「理論」と「方法」の問題

Schlözer は、その晩年になって統計学の主著「一般的統計学」を国家体系の第二部として計画したが、結局その第一分冊を「統計学の理論」という表題で出版したにとどまった。——彼はその第2分冊で、「基本力を論じ、モデルと表を伝え、そして Süsmilch の古典的書物からの、抜萃をあたえる」ことを予告したが⁽¹⁴⁾、これは実現されなかった。——しかし、ここでは、彼ははじめて統計学の「理論」——彼はこの第一分冊にさらに「序説」という限定を付しているのだが——を独立に扱ったことに注目しよう。

本書の序文 (de Villers への献辞) につづく本文の大見出し「統計学の概念、本質的諸部分 (したがって範囲と境界線) および方法を規定するための試み」は彼の「統計学の理論」の内容を示す言い換えであると考えてよい。また「統計学をとりあつかう種々の方法」と題する章の冒頭にいう。「われわれの科学の取扱い (Bearbeiten) は三つの異った仕方では生ずる、国家の官吏がそれを創造する、私的文筆家はただ蒐集する、理論家は創造と蒐集の技術について両者と論じあう⁽¹⁵⁾」と。ここで、のちに問題とする統計の生産者と蒐集者 (私的統計記述者) の分離とともに、さらに統計の理論、統計理論家が概念的に分離されている。

彼は統計学の「理論家」の課題について述べ、「統計学のある理論が存在する……。しかし、今日なお、何が統計学であり、それは地理学その他その近縁の諸科学からどのように異っており、いかなる対象がれれに属し、そしてこの対象は、統計学によっていかに取扱われるべきかということについて一致がない。このことを研究し、そして可能なかぎり確定すること——これが理論家の第一の任務である」とするとともにさらに「第二に、一定の資料を獲得することは、何が、そして、いかに質問されるべきかという技術 (Kunst) を必要とする⁽¹⁶⁾」として、調査事項の研究と表式調査を前提とした

(14) Theorie der Statistik, Vorrede.

(15) Ebenda, S. 60. (16) Ebenda, S. 89.

表式のモデルとの研究を第2の課題としてあげている。

Schlözer 自身が認めているように、Achenwall 以降のドイツの大学統計学教師は一種の理論を先頭においているのだが、それらはすべて国家記述の序論にすぎなかったのにたいし、Schlözer はこれを逆転させて、「理論を主要問題として取扱い、最後にいかに理論を實踐すべきであるかという実験 (Probe) としてだけ、あれこれの主要国の国家誌 (Statskunde) を、聴講者の関心にしたがってとりあげる」という方法をとった。⁽¹⁷⁾

Schlözer が「統計学の理論」として考えたこと、それはもとより数理的技術を意味するものではなかった。その意味でたとえば Ch. Lorenz が「Schlözer の理論は統計学の現代的な方法論とは名称以外に共通なものをもたない」⁽¹⁸⁾ というのも、Lorenz の立場からすればもっともであろう。しかしながら、Schlözer が、ここで、統計学の概念を確定する問題と同時に「何を、いかに」という「技術」(Kunst) を統計学の理論の問題として提起したということは、過小評価すべきではないと思われる。つまり、Schlözer の段階にいたって、ドイツ大学統計学をめぐる統計学の本質規定についてすでに種々の見解の対立があらわれてきており、それが統計学そのものの検討を必要としただけでなく、現実の統計的観察の発展、しかも官庁統計の一定の発展が、ドイツの大学統計学の中に、何を、いかに調査し、いかに表示するかという「技術」の問題を提起したということである。Schlözer は言う。「われわれの科学の全本質は、信頼できる材料の生産および蒐集にある。しかして、人は一定の目的に使用可能なすべての材料を知らねばならぬ、人は使用可能なものを使用不可能なものから見わけることを知らねばならぬ、人は前者を発見し報告する技術を、さらにそれを明快な秩序で表示する技術を理解せねばならぬ。……もっとも洗練された技法 (mechanisme) は表になった形である……」⁽¹⁹⁾と。

(17) Ebenda, S. 91.

(18) Lorenz, a. a. O. S. 57.

(19) Theorie der Statistik. SS19—20.

III Schlözer と官庁統計

はしがきでもふれたように、Schlözer が官庁統計を重視したことは、すでに指摘されている。しかし、それだけではなく、前節の最後に引用したところから明らかなように、Schlözer は統計の生産（者）と統計の蒐集（者）を概念的に区別した。そして彼は、前者を政府（の職員）にもとめたのである。この点をより詳しくみてみよう。

「統計学の理論」の中で、統計学の概念の一応の確定のうえで、そこから導き出される15の「結論」（乃至は「注釈」）なるものがあげているが、⁽¹⁾その冒頭に、「真实性は統計的報告の第一のかつ不可欠な性質である」と述べられているように、この15の結論なるものは、結局は、統計的真實性をめぐる具体的な諸問題の検討となっている。Schlözer はいう、「今なお大多数の国の統計学が不真實を撒きちらしている。その原因は研究が数十年早く始りすぎたことである。30年前に………確實な資料は、当時なお一般に支配的であった公開の畏怖のもとで、きわめてまれにしか持ちえないようなものであった。しかし、人々は、それらをいつかはもたねばならないと仮定して、a priori に、それらを見積、推定および推量によって作り出した、そしてまったく厚かましくも、全国の面積の数字、人口の数字、輸出入の数字等々を評定した、それらはまったく空虚から、あるいは信用しがたい旅行記から取出されていた。………かくて新しい諸研究は当然笑いものになる危険があった。そして正当な考慮から、より良く教育された実務家たちは、『⁽²⁾講壇統計学と書齋統計学』——こう彼等はそれを名づけた——を輕蔑した」と。この状況を覆すものとして、Schlözer は啓蒙された政府の調査と公表に期待をかける。「今やつぎの大きな規則があてはまる。I. もっとも重要な統計的データは、私人ではなくて、政府だけがつくりだすことができる。三角測量

(1) Theorie der Statistik, SS 39—55.

(2) Ebenda, SS 40—41.

による全国の面積，幾何学的測量による耕地の全地積額，穀物・ブドウ・塩の完全な年収量，またその他数百のデータを，ただ政府だけが命令と適切な配備によって，信憑性をもってあきらかにすることができる。われわれ新しい世紀の統計学者は幸せだ！……啓蒙は君主たちに〔事実を知ること〕より入念にし，また〔公表について〕より度量を大きくした⁽³⁾と。

統計的データの作成者として政府に第一義的意義をあたえるこの考え方の基礎になっているのは，彼自身しばしば言及しているスエーデン⁽⁴⁾の製表委員会とその人口表，プロイセンの産業表，さらにはフランスにおける県知事の統計報告の開始など，各国政府の統計調査とその公表の漸次的前進にあったことは疑いない。ただし，Schlözer は，官庁統計の発展とその公表をこのように期待しながらも，その現状に満足していたわけでは決してなかった。統計の生産者について論じた所の冒頭で，「われわれがヨーロッパの各国から，あるいは最重要な諸国からだけでも，公的権威のもとで著述され公表された基本統計を受けとるに至るのは何時のことか！なお現在，私はただの一つも知らない⁽⁵⁾」と彼は慨歎し「文化を自負するすべての国家は，この30年来，それらの国家年報（Statskallender）をもっている。私が基本統計あるいは国家統計学（Reichsstatistik）と考えているところの恒常的な，いやむしろ中絶なしに継続する著作は，国民，政府および外国にたいして，それと並んで高い価値と実際の効用を持たないのか？⁽⁶⁾」と問う。

Schlözer の統計の公表にたいする主張は執拗である。「統計学と専制政治とは調和しえない。」「公表され，年々継続される統計学は市民的自由のパロメーターである⁽⁷⁾。」彼はペルシャの太守の例にかこつけて，支配者による不真実のでっちあげと事実の隠蔽を非難するとともに，さらに，政府の恐怖

(3) Ebenda, SS. 41—42.

(4) Ebenda, Vorrede; SS. 67—68; .

(5) Ebenda, S. 61.

(6) Ebenda, S. 65.

(7) Ebenda, SS. 51—52.

と羞恥が生みだす反時代的な機密主義にたいし、ドイツのいくつかの諸国の神秘主義が誤ったジャーナリストの報告をもたらし、それが、フランス占領軍による過大な国民の誣求に利用されたということによって機密主義の有害さを例証しようとする⁽⁸⁾。

さらにまた、Schlözer は、「政府自身によってまたはその権威によって公表されるデータも正しくないことがありうる」と、統計調査そのものの誤謬の可能性を正しく指摘した。「真実はたんに命令と罰則によって強制することはできない。詳細で明瞭な規則書、技術的に正しい表式——容易に、機械的に、そして一定形式で実行されえ、それによって官吏が求められた報告を送ることができる表式——が役所に前もって与えられねばならない。そしてそれでもなお、政府は、すくなくとも最初の数年には、そしてこの仕事が完全に軌道にのるまでは、つねに、人口表、教会表、商業表等々のもとの、未熟、怠慢、さらに故意によってさえ、不正確さがそれらに入りこむということ⁽⁹⁾を予期せねばならぬ」と。みられるごとく、ここでは調査表式の問題と記入段階での誤りの可能性——この表式調査の段階では主として記入担当者たる官吏ないし僧侶の責任での——が取上げられている。

Schlözer が官庁統計の発展に多大な期待をかけるとしても、それが実際にはなお、その実施、公表の範囲において限定されており、またその内容の真実性において疑問の余地があるとすれば、彼は、統計の蒐集家 (Sammler) たる私的文筆家に大きな役割を残さざるをえなかった。「各政府自身が、その国民と外国人にその国家顕著事項の完全なかつ信頼すべき敘述を与えないかぎり、私的文筆家がこれを企てるばあい、それはなお価値のある仕事として残る⁽¹⁰⁾。」しかし、私的著述家はあくまで「蒐集家」である、つまり既存の統計的資料の利用者にすぎない。彼等が「自己の観察から附加しうるもとは

(8) Ebenda, SS. 52—53.

(9) Ebenda, S. 43.

(10) Ebenda, SS. 63—69.

全体としては小さい。」したがって「この〔既存の統計的資料〕の貯えの量と品質は、著述家がこの貯えを探し出し、また正しく利用する熟練とあいまって、統計学の価値またその著者の価値を規定する」⁽¹¹⁾「したがって、主要問題は、正直な統計家が彼の報告を取り出す典拠は何か、ということである。ここでわれわれの科学の批判がはじまる、それは著述家の統計学 (Sriftsteller = Statistik) が名誉を保持すべきだとすれば、ますます厳格にならねばならない。」⁽¹²⁾

Schlözer は、私的著述家の典拠として、法令 (Urkunde)、政府文書 (Statschriften)、内地人の文書 (Landeschriften)、旅行記、新聞をあげてこれらの資料的価値を詳細に検討しているのだが、これらは、今日の意味での「統計資料」よりずっと広いものであって、統計批判というよりは、史料批判というべものである。しかしそれにもかかわらず、彼が、ある意味で統計利用者というべき「蒐集家」(私的著述家) にたいして政府統計の批判をも内容としてふくむ資料批判の問題を強調していることは評価されねばならないであろう。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾

(11) Ebenda, S. 69

(12) Ebenda,

(13) 「統計批判」の問題は、後に彼の弟子 Герман (Hermann) によってうけつがれ、ロシアで展開された、Пруха, а. а. О, т. II. стр 244—250. この点は他日紹介したい。

(14) Schlözer にいたって、ドイツ大学派統計学は当時の政府の統計調査(それは表式調査を主体とする)との結びつきを明瞭にした。しかし、すでに Seckendorf にもみられるごとく、ドイツの大学統計学が成立するのと並行して、カメラリストの多くが統計調査の必要を説いているように(例えば C, Böhle, Die Idee der Wirtschaftsverfassung im deutschen Merkantilismus, Jena 1940参照)この両者は、思想的には無縁なものではなかったはずである。ただ、Conring や Achenwall では両者が直接に結びつきえず、間接的な補完関係にあったのにたいし、政府統計の公表の部分的前進を媒介として、直接的に結びついていくのが Schlözer の段階であると一応考えておこう。しかし、同時に Schlözer の段階では、絶対主義の統計調査にたいする抵抗もあらわれはじめており、1775年オーストリアで細目にわたるマニユファクチャ表の蒐集は今後不必要だと宣言された (Ebenda. S. 112) ように、この段階では、統計調査自体の変質も考慮しなければならないが、そのことを Schlözer がどのように考慮にいれているかは明瞭でない。なお、いわゆる「推算」の問題については次節で取上げる。

IV Schlözer の統計学と数量的観察

Schlözer の統計学は、国家制度と国家行政を含めた国民と国土の記述であって、彼はそれを数字的記述だけに限定したり、あるいはその資料を数量的資料だけに求めるようなことはしなかった。しかし彼のばあいには、Achenwall に比べて対象の量的観察、したがって数量的な資料にたいする要請がより強く、明示的にあらわれる。前出の統計の真実性を論じた箇所では彼は言う、「一つの資料があっても、それが無規定で、そして大多数のばあいに必要であるように数字で表現されていないばあいは、ほとんど使用できない」と。「都市は繁盛したマニファクチャをもち、それには多数の労働者が就業し、農村では巨大な量の絹が紡がれる」等々の記述は「何も識らないばあいに、何かを言おうとする多くの旅行記のきまり文句」だときめつけられる。⁽¹⁾

統計学が、対象が量的に測りうるものであるかぎり、それを測るべきことは、Schlözer にとって自明であり、不可欠であった。彼が国家の状態の時間的な、また外国との比較を重視したことから、このことは当然の要請であった。彼がもっとも重要な統計的データは政府だけが作成しようとしたとき、彼がそこであげている例は、すでに引用したように、土地測量、生産高調査であり、また彼の言う基本統計（人口、土地、生産物、貨幣）は、ほとんど政府の手による測量ないし統計調査によらなければならないものであった。そして、Schlözer は究極的には政府によるこれらの事象の測量や統計調査の可能性を信じたのである。

ところで、Schlözer が政府の組織的な調査に基本的な資料を求めたとき、それ以前の a priori な推測による統計記述を否定的に語っていることはすでに引用した。しかも彼はそこで、「その統計的不真実を一部銅版で印刷させ

(1) Theorie der Statistik, S. 44. Lueder によれば Schlözer は彼が Achenwall の教科書の第6版第1巻を1781年に彼の責任で出版したとき、その注ですでに同じことを指摘している。Lueder, Kritische Geschichte der Statistik, Göttingen 1817, S. 199.

た製表家 (Tabellen-Macher)」「(とくに経済問題で) ……読者に奇怪な比率をおしつける比率探索者 (Proportionen-Sucher)」を嘲笑的に語る。⁽²⁾ さらにまた、「仮空から前提を求め、ついで同様に恣意的な仮定から完全な連鎖式を引きだし、かくして統計学を a priori に創作した統計的計算屋 (Statistische Rechner) が三十年前にはまだドイツに、そしてもっとしばしばイギリスに存在した⁽³⁾」として、Political Essays concerning the present state of the British Empire, 1772. がその例にあげられている。

これらの発言には、Schölzer をいわゆる政治算術や表派統計学の否定者とおもわせるものがある。しかし、そのような断定は性急にすぎると言わざるを得ない。なぜなら、同じ「統計学の理論」の中で、彼は Süßmilch の研究を高く評価して、その第 2 分冊において、「基本力を論じ、モデルと表を伝え、Süßmilch の古典的書物からの抜萃を示す⁽⁴⁾」ことを予告しており、また別の箇所「人類の生と死のなかに、一般的な、恒常的な、驚くべき秩序が支配している」「さてこの秩序は個々のものにおいては隠れており、そして小数においては欺く；しかし数が大きくなればなるほど、それはそれだけ見やすくなり、全体における比率は……それだけ信頼しうるものとなる⁽⁵⁾」と述べて、この点での前進をロシア、フランス、オーストリアのような大国における将来の基本統計の作成に期待しているのであるから⁽⁶⁾。実際、すでに見たごとく、スウェーデン滞在時代に Wargentín を知り、ロシアでの人口動態統計の作成に寄与する過程で、Süßmilch, Wargentín らの仕事をさらに詳しく学んで、それらを範とする若干の研究を試みて以来、彼等の意味での政治算術的な統計利用にたいする Schölzer の敬意と関心は一貫している。

John は Schölzer が Süßmilch を皮相に読んだ証拠として、「グラントを

(2) Theorie der Statistik, S. 41.

(3) Ebenda, S. 14.

(4) Ebenda. Vorrede.

(5) Ebenda. SS. 67—68.

(6) Süßmilch にたいする評価はすでに Achenwall にもみられる。前出拙稿参照。

はじめとするイギリス人の功績を十分強調することができなかつた」といっているが、そんなことはないのである。⁽⁷⁾

Schlözer が「統計学の理論」の第2分冊で Süßmilch からの抜萃を示すことを予告し、またあの生死の一般的かつ恒常的な秩序は「人類学、自然法、財政学が探究する；しかし、正確さをもってそれを発見することは統計学によってのみ期待される」⁽⁸⁾とのべている以上、この時点ではすでに Schlözer は Süßmilch 的な研究を統計学の中に包摂することを意図したことはあきらかである。⁽⁹⁾ もちろんこのことは Schlözer が大数法則の原理を統計学の

(7) Прыха によれば、「ロシアにおける天然痘の無害について、ならびにロシア全体の人口について」という論文集（著述目録IV）の中で Schlözer は次のようにのべているという；「そのような〔人口についての〕知識の必要性は明白である。問題はかかにしてそれらを達成するかである。旧い世界はそのような問題も知らなかつた。人々は、魂を数え、それらの原因の解明なしに事実をうけとった。17世紀には、優れた手段が見出され、今世紀は独立の科学をつくり出した。イギリス—この科学の母—はそれに政治算術という名称をあたえた。J. Graunt はその第一の基礎をロンドンの死亡表を利用して創り出した。W. Petty はそれをさらに拡充した。しかして Halley, Struyk, Kersseboom, Déparcieux その他がそれをゆたかにした。プロイセンとスエーデンの政府に支持された Süßmilch と Wargentín はそれを一定の完全さにまで導いた。……自然科学、医学および神学がこれから利益を受けた。……しかし、その業績の主要なものは政治学の分野にある。Melon, Justi, Bielfeld 等は狂喜してそれについて書いている……」（Прыха, а. а. О. т. I. стр. 328.）

また Schlözer は、ドイツにおける政治算術（彼はこれを Staatsrechnkunst と訳す）の歴史を4つの段階に分っている。I. Graunt の「諸観察」の出版（1666—これは1662年の誤り）、II. Graunt のドイツ訳の出版、1762、III. Süßmilch の「神の秩序」、1741、IV. 1780年—これは Schlözer の執筆時である。そして「まさに今、ドイツの公衆は、このリストに注目するようになったと思われる。多数の政府が自らそれを教会からとりたてる。小新聞の出版者はそれを探し出す努力をする：そして人口数があらゆる国の統計の第1のもっとも不可欠の材料であるという命題、そして君主はその市民にかんして、彼のもっとも高価な資本にかんしてと同様、年々歳々記帳と計算をおこなわねばならぬという命題が、ますます一般に知られるに及びて、このような報告にたいする尊重がたかまる」とのべている、Schlözer, Briefwechsel, meist historischen und politischen Inhalts, Sechster Theil. 1780, S. 377.

(8) Theorie der Statistik, S. 67.

(9) Schlözer はしばしば政治算術—國家計算術—を「新しい科学」「独立の科学」と呼んでいるのだが。注(7)参照。また1807年に Abriss der Statistik und

基礎としたというような意味ではない。それはもっと具体的な対象と結びつけられた評価なのである。

このことと相まって、Schlözer のいう「統計学の技術」の中で、蒐集家の技術がどのようなものとして考えられているかが問題であろう。それは、既述のごとく、「使用可能な材料」を「発見し、報告する技術……さらにそれらを明快な秩序をもって表示する技術」とされ、そして「もっとも洗練された技法は表になった形式である」とされるのであるが、Schlözer が蒐集家の方法を論じている所では、前者は統計批判を含めた資料論であり、後者は統計記述の形式＝順序が中心になっており（たとえば Büsching の比較統計はここで問題となる）、数理的・技術的な方法には言及されていない。ただ彼が政府（統計の生産者）と文筆家（統計利用者）との関係についてのべたところで、文筆家は大臣が識っていること、そして公表されたこと以外は何も知らないが、「ただ彼はしばしばその加工技術（Verarbeitungskunst）によって大臣たちに今まで知られなかったデータ⁽¹⁰⁾を教えた」と但し書きを付しているところや、資料の重要さは「組合せ」（Combination）によって、「二つの現象のあいだに原因と作用とのあいだの関係を見出す」ときに発見される⁽¹¹⁾し、しばしば個々にそしてごく稀にあらわれることは「小さな数を集計することによって」はじめて重要性があきらかになる⁽¹²⁾と述べているところは、計算的加工を含めた統計利用を念頭においているように思われる。とはいえ、Schlözer において、計算的加工技術が問題になるとしても、それは対象から、したがってそのための資料論、記述体系論からきりはなされたものではなかった。

Staatenkunde を書いた A. Niemann が国家計算術（政治算術）を統計学の補助科学と考えたことについては、足利訳ヨーン統計学史，125頁参照。

(10) Theorie der Statistik, S. 42.

(11) Ebenda, S. 45.

(12) Ebenda, S. 46.

ところで、Schlözer のばあい、Graunt, Süßmilch の系統の政治算術と「表派統計学」とにたいする見方はやはり区別してみなければならないと思われる。これまでのべたところから Schlözer が表的表現形式そのものを非難したとは考えられないから、彼が「表派統計学」を非難するのは、つぎの二つの点であったと考えられる。すなわち、第1は、すでに引用したごとく、彼等の数字、つまり推計された数字が、多くは不確実な前提と根拠のない推論にもとづいているという意味での批判であり、第2は、表派統計学が、人口、土地面積、国民所得といった限られた指標をもって、国力あるいは国民の幸福を測ろうとした点であって、たんに国家制度や国家行政についての記述がないということだけではなく、国家の基本統計についても考慮すべき事項はそのような少数の指標に限られないということを含めた批判⁽¹³⁾である。彼の批判は、この限りでは根拠のない外在的な批判ではない。Schlözer は死亡率にもとづく人口推計などはむしろ推奨し、自分でも試みている。ただそのばあいも彼はできれば人口の数えあげを同時におこなうべきだと考えていた⁽¹⁴⁾。まして経済諸量のばあい、経済諸量内の安定的な関係ないし前提の妥当性がたしかめられていない以上、安易な推計よりも、政府の調査を促進し、それに依拠することを主張したと考えるべきであろう⁽¹⁵⁾。Schlözer の表派統計学の非難は、数量的観察一般についての非難からでたものではない。

(13) Theorie der Statistik, SS. 15—16参照。

(14) 基本統計の作成にあたって「5.人は村長をつうじて人口を数え、そして聖職者に出生、死亡および婚姻表をつくることを教える」(Ebenda. S. 63)。

(15) Schlözer は、初期の論文において、開明的政府に人口の調査を求めるとともに、「最後に間違をおそれずに、国家経済のすべての部分の相互関係を計算する」ことを求めた(Прыха, а. а. О. том I. стр. 66)。また、人口動態と物価の関係、マニユアクチャと物価騰貴のような諸関係の統計的研究にかなり注目していた。たとえば前者は Briefwechsel meist historischen und politischen Inhalts, Theil IV. 1779. S. 130 u. 132 また後者は Briefwechsel meist statistischen Inhalt, 1775, SS. 209—212) など。後者のばあいは、相関を示すための、かなり奇妙な計算を自ら試みている。それにも拘らず、結局 Schlözer は経済現象に出生率や死亡率のような安定性を見出しえなかったであろうし、あるいは部分的データの一般性を承認しえないと考えたにちがいない。

V 要約と問題点

Schlözer の「統計学」は、その学問規定（統計学＝国家記述）にかんする限り、Conring, Achenwall の正統な継承以上のものではなかったが、彼が「統計学の理論」において総括しようとしたところの、統計学に関連する彼の諸見解には、彼自身の統計的研究をも含めた Achenwall 以後の国状的統計学の普及と多様化、政治算術との交流、政府統計の一定の前進が反映され、Achenwall とは違ったいくつかの特徴がみられるのである。

いま、それらを列記してみれば、(1)国家顯著事項のなかで Schlözer が「基本統計」とよぶところの社会の生産力的要素の観察が Achenwall 以上にさらに重視され、それが記述の体系にも反映して前面におしだされたこと、(2)これと関連して、数量的観察と表示とが大多数の事項にとって不可欠の要素として明示されたこと、(3)前の二つのことと関連して、主要な統計的材料が政府の調査（土地測量も統計調査も含めて）に求められ、これに伴って統計の生産者と統計の蒐集者（利用者）が区別されたこと、(4)統計の蒐集（利用）という観点から資料（統計）批判の問題が提起されたこと、(5)Büsching の比較統計を評価し、Süßmilch 流の政治算術を統計学の一環としてとりあげるなど、統計利用の多様な形態を包摂しようとしたこと、等々があげられるであろう。

しかも、彼はこれらの多様な諸契機を統計学＝国状学に包括するにあたって、「統計学の理論」という概念を設定したのである。それは、彼の統計学についての苦悩の産物とも言いうるものであるが、しかし、このことによって、彼は多様化された統計学の学問規定を比較検討するとともに、統計の方法の問題を自立化して上述の諸契機を導き出し、問題の所在を一定程度あきらかにしえたのであった。Schlözer の「統計学の理論」が大きな反響をよんだ理由もここにあると思われる。もちろん、そのことは、問題を解決したことを意味するわけではない。むしろそれはその直後の統計学論争がひきおこ

す契機の一つともなったといってもよいであろう。

Schlözer は、ドイツ大学統計学の伝統の内部で、可能なかぎり数量的観察への展開をおこなうとした。そこには後のドイツ社会統計学を展望させるものがある。しかし、直後の統計学論争との係りでいえば、統計学の伝統的規定との矛盾とは別に、Schlözer のまえには、現実的な障害が待っていたといえる。即ち Schlözer がその所説の礎石として重視した開明的政府の統計調査は、それが実は絶対主義の規制政策と結びついているかぎりには、新興の市民階級の要求とは必ずしも一致しえないだろうという問題がその一、このことは、Schlözer の表派統計学への批判が、それ自体としては正当であるにも拘らず、別個の意味をもちえたということの意味する。第二は、Schlözer が、経済的要素を重視し、現実主義的な数量的観察を重視しているにも拘らず、激動する時代の歴史把握、ヨーロッパの動向の分析において、やがて立遅れゆく。そこに彼の社会経済理論の貧困さがあらわれになるのであるが、それは同時に当時のドイツの政治算術派や表派統計学者の少なからぬ部分にも言えるのであって、この両者も Schlözer も共々、いわば威信を失い、ドイツ統計学の混乱の時代に入って行くといえるのではないであろうか。

Schlözer は、「統計学」の規定の場合にあらわれる国状記述の固定的な体系づけにも拘らず、自らは Achenwall 流の国状記述の教科書を書くことよりは、彼の雑誌において、統計的材料を時事的に公表することに力をそそいだ。このことは、第一に、彼が時々刻々変化する歴史事象と静止的統計記述の規定との矛盾を解決しようとした止むをえざる試みであり、その問題は、「統計学の理論」では、継続的に公表される基本統計への要求としてあらわれている。それはともあれ、この雑誌において、Schlözer が、その「啓蒙的立場」の制約はともかく、統計を専制政治批判、非合理主義の批判のために報道し利用して、それを公衆と結びつけるのに一定の役割を果たしたことは無視しえない。そして、彼の合理主義と批判精神は、彼の弟子たちの中の進歩的部分の形成に役立ったといわれる。この弟子たちのうち、Lueder と

Герман (Hermann) が注目される。両者とも、A. Smith の経済学の大きな感化を受けたのであるが、前者は、ドイツローマンチズムの強い影響下に統計学の否定にたどりついた。後者は、ロシアにおいて統計局の創造にあたり、Schlözer の統計学を批判的に発展させながら、デカブリストたちに接近した。他日これらの問題も含めて、統計学論争との関わりにおいて、あらためて Schlözer にちかかってみたい。